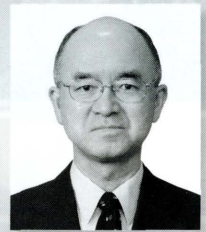


## 映像資料をもっと活用するために

著者	葉袋 秀樹
雑誌名	視聴覚教育
巻	65
号	6
ページ	2-3
発行年	2011-06
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/114508">http://hdl.handle.net/2241/114508</a>

視 て 聴 い て  
わ た し の  
提 言



みない ひでき

# 映像資料を もっと 活用するために

薬袋 秀樹

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科教授  
1948年兵庫県生まれ。慶応義塾大学経済学部・文学部卒業、東京都立図書館勤務を経て、東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。図書館情報大学助手、助教授、教授（生涯学習教育研究センター長併任）を経て、大学統合により、現職。専門分野は公共図書館論。これからの図書館の在り方検討協力者会議委員（主査）として、「これからの図書館像」（2006年3月）等の作成を担当する。2010年度第16期日本生涯教育学会長に就任。著書に『図書館運動は何を残したか』（勁草書房、2001）他。

ビデオ教材は効果的だが……

筆者は大学教員で、図書館関係の授業を担当しており、時々授業で、大学図書館から借りたビデオ・DVD教材を使用している。大学教員の立場から、ビデオ教材等の映像資料の利用方法の改善策について考えてみたい。

よく利用するのは、国立国会図書館の紹介、公共図書館の障がい者サービスやレファレンスサービスに関するビデオである。

国立国会図書館の紹介ビデオでは、同館の施設や業務の全体像や具体的な実態を知ることができる。利用者は、資料やサービスのごく一部を利用するだけで、全体像や具体的な実態を知ることが難しい。障がい者サービスのビデオでは、障がい者の人びとの様子や介助の方法を知ることができる。日本では、日常生活で障がい者と接する機会が少ないため、障がい者について知ることが少ない。レファレンスサービスは図書館の専門的なサービスであるが、図書館について学んでいる学生でも、利用経験は少ない。ビデオ教材で、その実

際を知ることによって、イメージがつかめ、学習が容易になる。

このような図書館の現実の姿は、言葉では伝わりにくいため、映像が効果的である。学生はビデオを熱心に見ており、感想でも「ビデオを見ることができてよかった」という声が多い。しかし、ビデオ教材は利用しやすいものではなく、そのためか、効果的である割には、利用が少ないようである。

ビデオ教材はなぜ利用しにくいのだろうか

ビデオ教材はなぜ利用しにくいのだろうか。本や雑誌は人びとの目に触れる機会が多い。書店の店頭や図書館に並んでおり、新聞の広告や書評等の案内も多い。パラパラめくれば、役に立つかどうかの判断ができ、役に立ちそうなページを探し出すことができる。これに対して、ビデオは人びとの目に触れる機会が少なく、中を見るのが難しい。ビデオが授業で利用できるかどうかを判断するには、数十分かけて視聴する必要がある。



## ビデオ教材を利用しやすくするには

利用者から見れば、ビデオ教材の案内や紹介はきわめて不十分である。ビデオ教材は、本や雑誌では理解しにくい内容を収録しており、案内等も少ないのであるから、本や雑誌以上に内容の案内や紹介の方法を工夫する必要がある。

第一に、ビデオをもっと人びとの目に触れるようにすることである。一部の書店では、専門主題の記録ビデオをその主題の本の隣に置いている。そのほうがお客の目に触れやすいからである。公共図書館でも、長野県の塩尻市立中央図書館では、DVDを図書と一緒に主題別に配架している。また、公立図書館の目録では、検索したときに、本とビデオのデータが一緒に得られて便利である。

第二に、ビデオの上映機会を増やすことである。商業店舗では、商品の傍でプロモーションビデオを上映している。図書館でも、著作権法上可能な範囲で、展示スペースなどでビデオを上映し、集会所等で上映会を行うことが考えられる。

第三に、パッケージに詳しい情報を記載することである。市販の記録ビデオでは、収録している事項の詳しい解説とそのキーワード、代表的な画面の例などが掲載されており、参考になる。

第四に、利用者による評価を集め、優れたビデオ教材を判別できるようにすることである。アマゾン等で行っている読者による本の書評の方法が効果的で、参考になる。

第五に、ウェブサイトで、過去のビデオ教材も含めて、ビデオの内容や活用方法や評価を詳しく案内することである。ビデオ教材は点数が少ないため、関連する情報が少なく、また、古いものも役に立つからである。

## インターネット上の映像資料も利用できる

このような教材として作成されたビデオ教材以外にも、さまざまな映像資料がインターネット上で公開されている。

一部の研修機関はウェブサイトで映像資料を公開している。国立教育政策研究所社会教育実践研究センターはインターネット放送により社会教育情報番組「社研の窓」を公開している。先進的な生涯学習・社会教育の事例を紹介しており、公共

図書館の事例も含まれている。

他方、YouTube等の民間の動画サイトが広く利用されており、公共図書館に関する映像資料も公開されている。短いものが多いが、広報ビデオやテレビのニュース等を見ることができる。

これらはキーワードによる検索や内容の確認が容易で、学生が自分で見ることができるため、大変利用しやすい。

## 今後の課題—映像資料を活用するために

これらの二種類の映像資料を活用するには、前提として、図書館による映像資料の収集・提供とインターネット環境の整備が必要である。

多様な映像資料を活用するには、次の三つのことが必要である。

第一に、映像資料の全体像を理解できるように、映像資料に関する情報を包括したリンク集を作成することである。リンク集一つで、今まで埋もれていた情報が広く知られるようになるため、利用者の多様な関心に応えるものが必要である。

第二に、映像資料に関する情報を提供するウェブサイトでは、その存在を知ってもらうために、メールマガジン等を用いた積極的な情報発信や広報活動を行うことである。

第三に、映像資料の分野での情報活用能力の学習を支援することである。情報を探し出し理解し活用する能力がないと、せっかくの映像資料も活用できない。資料や情報の知識、情報検索、著作権、情報技術等に関する各種のマニュアルや研修テキストの整備、講座等の紹介が期待される。

上記のうち、リンク集の作成と情報活用能力の学習に対する支援を行う機関として、図書館が考えられる。この二つは、図書館の今後の大きな課題となることが予想される。

図書館は、これまでは、資料や情報を所蔵して提供してきたが、現在では、資料や情報はさまざまなルートで入手できるようになっている。このため、図書館には、所蔵していない資料も含めて、それに関する情報を組織化して案内し、利用方法の学習を支援することが期待されている。社会環境の変化に応じて、図書館もその役割を変えて行く必要がある。